

## 大学生の共依存傾向と自己愛傾向との関連について

### The relationship between codependent tendency and narcissistic tendency in college students

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000-080701 青木 昭宏

#### 問題・目的

近年、メディアなどで共依存の問題が取り上げられる事が多い。西尾（1996）は、共依存症者の行動パターンについて、「自らを犠牲にして他人を助けたり、世話をすること」、「自己評価が低いということ」、「自信のなさ」、「自己確立ができていないこと」、「一人でやっていけるという自信のなさ」、「他人の行動、感情、考え方を変えようとコントロールする」、「他者との境界線のあいまいさ」の7つを挙げている。共依存の概念は、多様であるが、他者から必要とされたい、他者をコントロールしたいといった人間関係の囚われという点で共通すると言える。このように、共依存は自尊感情や自己肯定感がもてない、自他境界がつかれない、適切なセルフケアができないなどの特徴があり、さまざまなアディクションやDVと共依存との関連が報告されている（米山, 2005）。また、引きこもりの大学生は、自身の低い自己評価に悩んでいることが報告されている（福田, 2000）。これらの問題を考える際、自己愛が取り上げる機会が増えてきている。例えば、精神医学の分野では、アパシー・シンドロームや対人恐怖症など、青年期に見られる精神症状に関連する人格特性の1つとして自己愛が注目されている（笠原, 1999；北西・久保田, 1998；西岡, 1999）。また、心理学の実証的研究においても、自己愛傾向に焦点を当てた研究が多数されており、自我同一性、対人関係、異性関係といった青年期に重要とされる様々な側面との関連が検討されている。これまで、自己愛はその病理的側面について述べられることが多かったが、近年、自己愛の肯定的な側面が注目されている。小塩・井上（2002）は、自己愛が必ずしも何らかの病理をもたらすものではなく、むしろ精神的健康において重要な役割を担うものであると述べている。三船・氏原（1991）は、青年期における自己愛傾向は自我同一性の確立と深く関連すると述べており未発達な自我の問題である共依存との関連が示唆される。現在、日本の大学生の多くが高い共依存傾向をもつことが報告がされている（橋本・日下, 2002）。しかし、大学生のほとんどが共依存の症状を発症せずに生活している。先行研究では、自己愛傾向の誇大性が適応的意味を有していることが報告されていることから、共依存傾向が高いにもかかわらず、共依存の症状を発症する学生が少な

いのは、この自己愛の誇大性が関係していると考えられる。従って、本研究では、自己愛の肯定的側面について検討し、共依存傾向との関連について検討していく。

## 方法

**調査対象者** C県S大学の大学生、大学院生、K県Y大学の大学生。有効回答数は256名（男性117名、女性139名、平均年齢22.34歳、SD4.17）であった。

**測定尺度** ①洪金子（2009）が作成した共依存尺度 99項目 ②中山・中谷（2006）が作成した評価過敏性－誇大性自己愛尺度 18項目 ③GHQ28 28項目

## 結果と考察

誇大性の自己愛傾向の適応的側面を検討するために、誇大性の自己愛傾向と共依存傾向、精神的健康度との関連を検討したところ、関連は認められなかった。しかし、誇大性の自己愛傾向と共依存傾向の「境界が乏しい」、「低い自己評価」、「対処技術の乏しさ・低学習」との間に、精神的健康度の「社会的活動障害」と「うつ傾向」と有意な負の相関が認められた。これは、誇大性の自己愛傾向が自己像の安定につながり（Stolorow, 1975）、他者に関わりなく自己評価を肯定的に維持する機能として働き（高橋, 2008）、また誇大性の自己愛傾向が適応と積極的に関連したためであると推測され（小塩, 2002）、自己愛が適応に重要な役割を担ったと言えるのではないだろうか。また、自己愛を「誇大型」、「過敏型」、「混合型」、「低自己愛群」4つに分け、自己愛の型によって、共依存傾向と精神的健康度に差があるかどうかを検討したところ、「誇大型」の学生は、「過敏型」の学生よりも共依存傾向が低く、また、精神的健康度が高いことが支持された。これらの結果からも、自己愛傾向の「誇大性」が青年期の学生の精神的健康に肯定的な意味を持つことが支持されたと考えられる。

精神的健康度を従属変数とし、共依存傾向の高低、自己愛の類型、を独立変数とする2元配置の分散分析を行った結果、共依存傾向の高低と自己愛の類型との間に交互作用は認められず、共依存傾向の高低、自己愛傾向の類型で主効果が見られた。従って、誇大型で共依存傾向が高いものは健康であるという仮説、過敏型で共依存が高いものは、健康ではないという仮説は支持されなかった。多重比較の結果、共依存傾向低群は共依存傾向高群よりも精神的健康度が高く、誇大型の学生は、過敏型の学生よりも精神的健康度が高いこ

とが認められた。本研究では、共依存傾向が高い大学生が多く存在するにもかかわらず、共依存を発症せず生活できるのは、自己愛傾向の誇大性が適応的に関連するからであると考えたが、結果から、共依存傾向と自己愛傾向はそれぞれ単独で精神的健康度に関連することが認められた。しかし、本研究で、自己愛傾向と共依存傾向、自己愛傾向と精神的健康、共依存傾向と精神的健康との間に関連があることが示唆されたことから、共依存傾向が高い大学生が、共依存を発症せず生活できるのに、誇大性の自己愛傾向の存在は無視できないと考えられる。洪（2007）は、虐待、DVなどの人間関係の問題やさまざまなアディクションには、ほとんどの場合ベースに共依存があり、また、長引く鬱、強迫行動などの心身の不調のベースになることがあると報告している。共依存の中核症状である自尊心の低さ、自他の境界がつかれない、適切なセルフケアができないといった特徴は、子ども時代のトラウマや、育ってきた家庭内の機能不全状況に過剰適応することによって起こるとされている（洪、2007）。本研究では、共依存傾向が高い大学生が多く存在するにもかかわらず、共依存を発症せず生活できるのは、自己愛傾向の適応的な側面が関連するからだと仮定したが、共依存傾向に関連する要素を自己愛に限定するのではなく、原家族との関係を考慮した上で再検討する必要があると思われる。